

# 日本社会心理学会会報

221号



発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>  
編集・制作 広報委員会(担当常任理事:藤島喜嗣)

2020年1月15日

## 日本社会心理学会第60回大会・開催報告

日本社会心理学会第60回大会が2019年11月9日(土)・10日(日)に開催され、盛会のうちに無事終了いたしました。

### 概要報告

期日: 2019年11月9日(土)・10日(日)

会場: 立正大学品川キャンパス

大会準備委員長: 西田公昭

1. 参加者数 666名(予約参加411名 当日参加255名)
2. 発表件数 大会準備委員会シンポジウム1件 自主企画ワークショップ9件 口頭発表94件 ポスター発表231件
3. 発表取り消し ポスター発表3件

### 日本社会心理学会第60回大会(立正大学)に参加して

渡邊芳之

日本社会心理学会第60回大会が、2019年11月9日、10日の2日間にわたって立正大学で開催されました。会場に着いて、大都会のビル街のなかにオアシスのように立地しているキャンパスがまず印象的でした。

私も現在はパーソナリティ心理学の領域で仕事をする事が多くなりましたが、もともと出身は社会学部社会心理専攻ですし、日本社会心理学会は大学院生になって最初に加入した学会、初めて自分の研究を学会発表した学会でもあります。しかしなぜか学会大会には10年以上もごぶさたしていました。それが今回思いがけなく学会の理事に選ばれたことから、大会前日の理事会に出席するとともに、2日間の日程を通じて大会に参加することができました。依頼を受けましたので、学会参加の感想を述べたいと思います。

まずうれしかったのは、ひさしぶりの大会参加で、これまでしばらく会うことのなかった社会心理学領域の古い知人、むかしお世話になった先生方に会って挨拶を交わし、話をする事ができたことです。みなさんお元気で活躍されており、安心し、また頼もしく思いました。

学会会場の澁刺とした雰囲気も印象に残りました。発表者、参加者全体に若い会員の比率が多く、ポスター会場などでは活発な議論が繰り広げられていました。ああ社会心理学会ってこんな雰囲気だったな、変わらないなと感慨深いものがありました。また、最近では少なくなった口頭発表のセッションが残っていることにも感心し、参加してみるとポスター発表とはまた違って、セッション会場全体を巻き込んだ議論になりやすいところが魅力的だと感じました。他の学会でも口頭発表をもういちど企画してみるのもよいのではないかと思います。全体にシンポジウムやワークショップ、(行われていない)懇親会などの企画より研究発表にプログラムの重点が置かれていることも、社会心理学会ならではの思いました。

自分が社会心理学会で研究発表していた頃と比較して変わったと感じたのは、社会的行動をめぐるマクロなテーマが息を吹き返して、社会心理学の守備範囲が再び大きく広がっていることです。大会企画シンポジウムの「愛と正義と暴力と:過激主義の社会心理学」、ワークショップ「Society 5.0 の課題と社会心理学の貢献」「欺瞞の被害と社会心理学:行政機関とのコラボ展開に期待」など、リアルな社会的問題に向き合った内容の企画や研究発表が多く見られ、時代の変化を感じさせました。

心理学の研究結果の再現性、研究不正や疑わしい研究実践の問題はいまやどの学会でも必ず話題になりますが、リアルな危機を最も感じているのは社会心理学者だと思います。今回もワークショップ「社会心理学における実験結果の再現可能性(2)」に多くの参加者が集まっていたし、それと関連して統計モデリングなど新しい研究方法論への興味の高まりも体で感じる事ができました。

会員総会ではこれからの心理学系国内学会の協力のあり方を考える「コンソーシアム」を、近接領域のいくつかの学会と一っしょに組織することが報告されました。学会をめぐる社会的状況の大きな変化にどのように対応していくか、自分はコンソーシアムに参加する日本パーソナリティ心理学会の理事長も務めていますので、唐沢会長や理事会の先生方とよく意思疎通をすすめ、積極的に動いていきたいと思っています。

今次の大会は第60回というひとつの節目の大会でした。私がこの学会に入ったのは1985年か86年だと思いますので、その60年の半分以上を本学会会員として過ごしたことになります。自分が心理学者として働ける残り年数はもう両手の指に満たなくなりましたが、これまでよりも少し、社会心理学会への所属意識を強めていきたいものだと思います。最後に大会準備委員長の西田先生、ほんとうにお疲れさまでした。

(わたなべ よしゆき・帯広畜産大学)

## 社会心理学会第60回大会 参加記

藤村まこと

社会心理学会第60回大会(2019年11月9-10日)は、気持ちの良い秋晴れの日立に立正大学にて開催されました。2日間の参加日程の中で、私にとって特に印象深かったのは一日目の大会企画シンポジウム「愛と正義と暴力:過激主義の社会心理学」だったかと思います。最近、個人や集団がそれぞれの信条のもと過激化し、言語や行為による暴力的なふるまいをする様子を、テレビやネットを通して目にする機会が増えたように思います。それを見聞きしながら何が起きているのだろうと“もやもや”とした何かを感じていたこともあり、今回のシンポジウムで先生方のお話を聞けることを楽しみに思っていました。同じ心境の方も多かったのでしょうか、一般公開された本シンポジウムは学会員だけでなく一般の方も数多く参加されていたようです。

シンポジウムの内容を、資料をもとに思い起こして概要をまとめたいと思います。まず、西田公昭先生より趣旨説明がなされ、その後オウム真理教などのカルト集団での研究をもとに導かれたマインドコントロールによる個人の変容過程、そして信者の過激化の説明がなされました。次に縄田健悟先生からは、海外の文献やデータに依拠して、集団暴力の発生モデルには、集団同一視や没個性化によって生じる“集団のために”というコミット型、そして名誉と称賛を希求する生存戦略型の2つの過程があることを示されました。お二人に共通するのは、“普通”の人々が集団内の対人的相互作用や状況の力によって変容し、過激化していく様子を示されたことだと思います。加えて松井豊先生は、地下鉄サリン事件の被害者のその後を丁寧に分析され、当時の経験が20年後も身体症状として影響を残すことを示し、被害者とその支援者の視点を提供してくださいました。最後に、指定討論の唐沢穰先生は、道徳やイデオロギー、そして集団間紛争に関する知見を挙げながら、社会心理学の視点の有用さを指摘されました。その際、集団の脅威(不安、恐怖、被害者意識)や集団で共有されるイデオロギーそのものの過度の単純化についても触れ、集団レベルの視点を提供して下さったように思います。このように、ひとつの事象や現象に対して、複数の視点と多様な方法論を用いてアプローチを行い、データによる裏付けを用いて、社会問題の理解と解決を試みる取り組みは、まさに社会心理学の醍醐味であるように感じました。シンポジウムを通して、目のつけどころが整理され、これまでの“もやもや”がいくらか解消されたように思います。また、シンポジウム後には、別の説明の仕方があるのではないか、今回の説明原理は別の事象にも適用可能ではないかという研究者のやりとりを見る機会があり、ぜひ他の先生方の研究のお話も聞いてみたい、今回のシンポジウムが次の企画につながるとういいな、と淡い期待を抱いたこともここに記しておきます。

私自身は、チームレベルの風土と課題特性が失敗と成功からの学習に及ぼす影響過程を最近の研究テーマとし、医療組織や産業組織をフィールドにて少しずつ研究を進めています。そのため、ポスター発表や口頭発表は、集団や産業組織をテーマとしたセッションを中心に参加し、情報収集をさせていただきました。研究テーマに関連性がなくとも、発想や視点、実験や調査のデザイン、新しい統計手法など参考にしたい研究も多く、研究者に直接お尋ねして意見交換をさせていただくこともありました。最新の研究動向を知る上で、社会心理学会の年次大会は貴重な情報源となっています。最後になりましたが、このような快適な学会大会を実現して下さった大会準備委員会の先生方や関係者の皆様には深くお礼申し上げます。休憩室のコーヒーとお菓子にはとてもとても癒されました。皆様、ありがとうございました。

(ふじむら まこと・福岡女学院大学)

## 2019年度日本社会心理学会賞 第21回選考結果のお知らせ

第21回にあたる2019年度日本社会心理学会賞が選考され、第60回大会総会にて発表、総会後に授賞式が行われました。各賞をご紹介しますとともに受賞者のコメントを掲載いたします。受賞された先生方、本当におめでとうございます。

## 優秀論文賞

秋保 亮太・縄田 健悟・池田 浩・山口 裕幸

「チームの振り返りで促進される暗黙の協調:協調課題による実験的検討」第34巻2号

チーム活動において、メンバー間での「暗黙の協調」が大きな役割を果たすことが知られている。しかしその成立機序については、理論的考察が先行し、実証的検討が不足していた。本研究は、暗黙の協調を促進し得る要因として「チームの振り返り」と「共有メンタルモデル」に着目した上で、72チーム(ペア)を無作為配置した実験により、この問題に実証的にアプローチした。そして、チームでの振り返りが繰り返されることを通じて、暗黙の協調が促進されることを明らかにした。理論が先行していた問題に対し、①チームのパフォーマンスを測定する手法を工夫することで、暗黙の協調を客観的に数値化することに成功した点と、②課題遂行とチームの振り返りを繰り返す実験デザインを採用することで、暗黙の協調が形成されていくダイナミクスに実証的に迫った点が高く評価された。

## 奨励論文賞

荒川 歩・菅原 郁夫

「裁判員裁判を想定したフォーカスグループの効果の検証」第34巻3号

裁判員裁判においては、法曹が、公判活動を通じて、法の専門家ではない市民でも十分な理解に基づいて意思形成できるよう、市民を説得することが求められる。しかし両者には知識の乖離があるため、法律家にとって、どのような形の情報提供や説明が市民の理解を促進するのか予測することは、しばしば困難である。この問題を解決する上でフォーカスグループの活用が注目されてきたが、その有効性の学術的検討は不十分であった。本研究は、丁寧に計画された実験的手法の下、フォーカスグループが、弁論を書く上で、市民の視点についての有効な情報を提供することを示した。通常の社会心理学研究においてはテーマになりにくい(しかしながら社会的に重要な)問題を取り上げており、かつ、その問題に対して社会心理学的な研究手法が有用であることを示した研究であり、その独創性が高く評価された。

**出版賞** 今年度は残念ながら該当がありませんでした。

## 出版特別賞

白岩 祐子

「「理性」への希求:裁判員としての市民の実像」ナカニシヤ出版

正木 郁太郎

「職場における性別ダイバーシティの心理的影響」東京大学出版会

上記著作において、白岩氏は、裁判員制度・被害者参加制度適用以降の刑事裁判場面に焦点を当て、「一般市民は感情的に判断を下してしまう」という法曹関係者や報道関係者が抱きがちな素朴信念に鋭く切り込み、個人の量刑判断過程について多面的な検討を行っている。また、正木氏は、職場における「性別ダイバーシティ」の向上が従業員にいかなる心理的影響をもたらすか、またどのような組織要因が整えばその影響がポジティブたりうるかを、職務特性や組織風土の差異に焦点を当てつつ、一連の企業調査を通じて探究している。

両著作とも博士論文を書籍化したもので、先行研究の十分なレビューと数多くの実証研究に基づき、現代日本社会が抱える重大な社会問題が健全な方法で検討されている。エビデンスと議論のバランスが適切で、明確な情動的・実践的価値を有している点が高く評価された。知見のインパクトや理論的貢献についてはなお課題も残るものの、今後の研究に対する奨励の意味を込め、審査員の総意をもって「特別賞」に値すると決定した。

## 選考委員会

編集担当常任理事 1名		村本由紀子(東京大学)	
常任理事以外の理事 6名	出版賞	石井敬子(名古屋大学)	西田公昭(立正大学)
	論文賞	池田謙一(同志社大学)	相馬敏彦(広島大学) 西村太志(広島国際大学)
		平石界(慶應義塾大学)	
理事以外の会員 4名 (編集委員/受賞者)	出版賞	脇本竜太郎(明治大学:受賞者)	熊谷智博(法政大学)
	論文賞	辻本昌弘(東北大学:受賞者)	竹村幸祐(滋賀大学)

## 受賞者のことば

### 優秀論文賞受賞者を代表して

秋保亮太

この度は、名誉ある優秀論文賞を賜ることができて大変光栄に存じます。このような評価を頂けて嬉しい限りであると同時に、身が引き締まる思いでもあります。今回の受賞を糧にして、今後の研究活動に一層励んでいきたいと思っております。お忙しい中、審査に携わり論文を評価して下さった選考委員の先生方に厚くお礼申し上げます。また、研究の遂行と論文の執筆にあたり、数え切れないほど多くの方々からご支援とご協力を頂きました。この場を借りて、お世話になった方々に感謝申し上げます。

この論文は、暗黙の協調 (implicit coordination)と呼ばれるチームワーク現象が徐々に実現していく過程と、チーム全体で話し合って振り返りを

することでその実現が促進されることを明らかにした研究をまとめたものです。暗黙の協調とは、ときに“阿吽の呼吸”と表現されるように、メンバーが課題遂行時に明示的コミュニケーションなしに円滑な連携を取ることを指します。この暗黙の協調は、チーム研究において注目されてきた概念ではあるものの、理論上での議論や示唆の提言などが先行し、実証的検討の蓄積が行われてきませんでした。その主たる原因は、暗黙の協調を定量化することの難しさにあります。例えば、自己報告式による質問紙調査の場合、チームが暗黙の協調を実際に実現できているのか測定することもできていなければ、また、その現象を観察することもできません。従って、暗黙の協調を現象として可視化し、客観的データとして測定するには、研究デザインの工夫が必要でした。

試行錯誤の上、我々はおもちゃ(BRIO社製Labyrinth game 34020)を用いた協調課題を考案しました(Figure 1)。このおもちゃは、本来、1人で盤面を傾けてボールを操作し、穴に落とさずにどれだけ移動させられるかというゲームです。ルールは単純ではありますが、実際に遊んでみるとなかなか難しいおもちゃです。本研究の実験時は、縦軸・横軸の傾き操作を2人に分担させ、その上で、操作中の明示的コミュニケーション(会話、身振り手振り)を全て禁じました。これにより、ボールを円滑に操作するには、暗黙の協調が必須となるようにしました。もし、本論文をお目通し頂く機会がありましたら、我々が難しい顔をしながらおもちゃを手にして課題を考案している姿を思い浮かべながら読み進めて頂くと、普通に本論文を読んで頂くのとはまた違った様相が感じられるのではないかと思います。

暗黙の協調に関してはまだまだ未解明な点が多く、今後検討すべき課題が山積みです。本論文の知見は、効率的なチーム活動について考えていく上での理論構築の非常に小さな一歩に過ぎません。もちろん、本論文のような実験室実験の知見が現実のチームにどこまで当てはめることが可能なのかは、追って検証をしていく必要があります。近年は、医療現場や教育現場などといった様々な場面でチームワークの重要性が叫ばれるようになってきました。その一方で、日本国内において心理学的側面からチームワークについて議論・検証しているものはあまり多くありません。チーム研究が今回このような表彰という形で注目して頂けたことをきっかけに、人と人のダイナミクスについて考える専門家である社会心理学者の皆様が、身の回りのチーム活動について振り返る機会となれば幸甚に存じます。

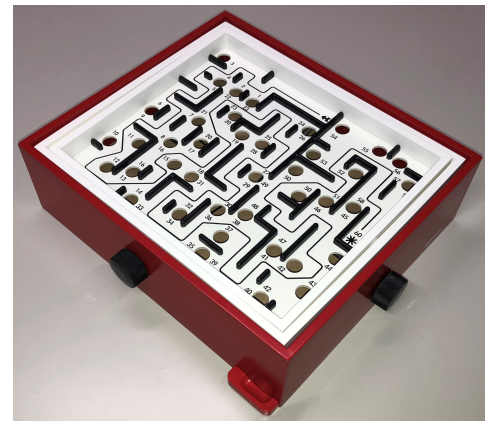


Figure 1 BRIO社製Labyrinth game 34020

(あきほ りょうた・中京大学)

## お礼の言葉にかえて

このたびは思いもよらず栄えある賞をいただくことになりました。ご審査くださった委員の先生方にこの場をお借りして御礼申し上げます。

本書は5年前に東京大学大学院に提出した博士論文を下敷きとしています。博論をご指導くださった主査・副査の先生方をはじめ、学会発表や投稿論文に親身なコメントをくださった多くの先生方、先輩・同僚・後輩のみなさま、お世話になった出版社に改めて感謝申し上げます。

刊行までのスケジュールは、私の場合(ぼんやりしていたため)かなりタイトなものとなりました。将来的に博論の出版化を考えている方に向けて、参考までに2013年4月から始まっている新しい博論公表ルールを付記します。

### 新しい博論公表のルール(超概要)

原則: 学位授与者は、授与日から一年以内に論文全文をオンライン公表しなければならない(改正前は「印刷公表」)

例外: ただし(出版や特許申請の予定、個人情報保護など)やむをえない事情がある場合には、全文の代わりに要約をオンライン公表する

※「例外」が適用された場合でも、一定期間内に出版などの目処が立たなければ最終的に「原則」が適用され、全文オンライン公表となります。その猶予期間は明記されていませんが、多くの大学は授与日から5年程度としているようです。

※最新&正確な内容は必ず「学位規則(9条)」などをご参照ください。

白岩祐子



本書のように科研費(研究成果公開促進費)の助成を受けたり、大学の出版助成を活用したりする場合には、手続きを上記の猶予期間内に終わらせる必要があります。

ところで、今年の社会心理学会でお会いした複数の院生さんから、「そろそろ学位をとりたいんですが、もう疲れてしまいました」という声を多く聞きました。私が今いる研究室には「ドクター・スランプ」という代々(?)言い伝えられてきた概念があります。それまで順調に研究を進め、業績を挙げてきた院生が、博論提出を前にして突如調子を落としたり、活力を失ったり、あるいは自己破壊的な行動に出してしまう状態をさします。いわゆる「ヴェニスに死す症候群」でしょうか。私自身はこのスランプを経験したことがなく(研究が順調であったことなどそもそもなかったからです)、上記の悩みに適切なコメントができる立場にはないのですが、個人的にお奨めしたいのは、博論とは違うテーマにも取り組んでみたらどうだろう、ということです。つまり、違うテーマを同時並行して進めるやり方です。

テーマは博論とまったく違うものでもいいでしょう。私自身は、博論で扱っている現象を別の観点からみつめるために、少しだけ違うテーマを扱っていました。「やらねばならないこと」がA面、「やりたいこと」がB面、という感じでしょうか。B面に取り組んでいると充実感はあるのですが難易度が高く気苦勞も多かったため、A面に戻ると「ああ、落ち着く」という感覚が得られたものです。今思えば、博論を相対化してフレッシュな状態を保とうとする試みを、無自覚にしていたのかもしれない。

まがりなりにも教員と呼ばれる立場になった今、それまで見えなかったことが少しずつ見えてくるようになりました。たとえば、大変恥ずかしいことですが、研究成果を発表する場があるのは当たり前、投稿した論文を審査してもらおうも当たり前だと、どこかで思っていたように思います。けれども、学会の開催校を引き受ける、大会委員を引き受ける、またそうした依頼をしてまわる先生方の後姿を目にして、毎年安定して学会大会が開催されてきたのはけっして当たり前なんかではなかったのだと思に至るようになりました。論文の審査や学術誌・会報の編集、賞や助成の審査、その他学会に関わるすべての仕事も同様です。そうした恩恵を受けてこれまでは研究に専念できていたのだなあ、と(指導教員には「今さら遅い」と叱られそうですが)ふり返るようになりました。そうしていただいていたものを私自身も、そろそろ次の世代の研究者に渡していかなければ、との思いを新たにしています。

はや字数が尽きてしまいました。賞を戴いた本は、一般の人々による法的判断の傾向を明らかにしたもので、「みんなが思いつかないような仮説を検証したい」という若さと生意気さにあふれた内容になっています。ご一読いただければ幸いです。

(しらいわ ゆうこ・東京大学)

## 出版特別賞受賞の御礼

正木郁太郎

この度は出版特別賞をいただき、まことにありがとうございました。お忙しい中で審査に尽力いただいた先生方、また各所でご支援いただいたみなさまに感謝申し上げます。

本書はタイトルの通り、企業組織を研究対象とした、職場で色々な人が一緒に働くこと(ダイバーシティ)に伴う種々の影響について、実証研究の成果をまとめたものです。中でも、どのような特徴を持つ職場では効果が改善するか、という調整要因に注目して議論をしています。自身の博士論文をもとにしており、不十分な点もありますが、「今後の研究の礎」としてぜひご活用いただきたいという思いも込めて、出版に挑戦いたしました。

本書の特徴であり、またその特徴ゆえに「苦勞した点」「悩み」について、2つ記したいと思います。

第一に、本書は「ダイバーシティとの向き合い方」という、社会課題に直結するテーマを扱った研究です。2019年12月現在も続く流れですが、「女性活躍推進」の政府・社会の流れのもと、企業やそこで働く人々は様々な問題に直面しています。「誰もが平等に参画できる企業組織」といえば聞こえはいいものの、現実には理想通りにはいかず、互いの違いに由来する様々なコンフリクトや、思ったほどダイバーシティ向上が成果を生まないことへの失望(過剰な期待の裏返し)……といった悩みを非常に多く耳にします。こうした悩みについて、問題を少しでも整理し、解決に向けた支援ができないか、といった思いが本書のスタート地点でもありました。

ただ、社会課題には日々変化していくという難しさもあります。本書のテーマでいえば、昨今は性別ダイバーシティの問題はやや忘れられつつあり、「働き方」の多様化や、メンバーの多国籍化(外国人採用)など、新しい課題が次々に浮上します。こうした日々移り変わる社会課題に対応する必要がある一方で、学術研究として頑健な知見を導くためには、慎重さと十分なデータの蓄積、時間をかけることが求められる……という、いわば「早さ」と「質」の両立には、現在でも悩まされています。

第二に、本書では企業内の調査データを複数扱っています。分析に直接用いた調査データだけでも10社弱、本文には登場しないもののヒアリングなどで伺った企業や個人を含めると30社以上ほどかもしれません。組織行動の研究は、どうしても実務家の方々と密に手を携えて進めないと成立しませんし、事実本書のアイデアでもそうした議論の中から生まれたものは少なくありません。その点で、本書は自分一人の努力によるものではありませんが、そうした蓄積を評価いただいたことを大変光栄に思います。

一方でそれに伴う悩みとして、学術研究としての精度が低下しがちになることへの悩みがあります。知見の一般化を追究する限り、できることなら、同じ調査手法・調査票・分析方法を用いて、数十の企業で同時に調査をすることが求められると思います。一方でそれだけの規模の実現は現実的にはなかなか困難です。またそれ以上に重要な点として、個々の企業によってそこで働く人や、事業の特徴などが異なることから、どうしても



結果にブレが出ることも多いです。個々の企業を見つめれば「なるほど」となる結果ではあるのですが、「結果が毎回100%再現はされない」という点では、一般化・再現性を志向する研究者として、歯がゆい思いも常にあります。

以上のような「悩み」の中執筆したため、本書は企業におけるダイバーシティの「すべて」を明らかにしてはできていません。だからこそ、ぜひ多くの先生方に企業組織におけるダイバーシティとの向き合い方という研究課題に参画いただきたく、本書がその「たたき台」になれば幸甚に存じます。

最後に、本書の基となる博士論文の執筆にあたって多大なるご指導をいただいた村本由紀子先生、そして研究にあたって多くのアドバイスをいただいた先生方、実務家の皆様がこの場を借りて感謝申し上げます。お名前をすべて挙げることはできませんが、今後ともご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしく願いいたします。この度はありがとうございました。

(まさき いくたろう・東京大学)

※奨励論文賞の荒川歩先生、菅原郁夫先生の受賞コメントは諸事情あり、ご辞退なされました。受賞論文に関する感想やエピソードは、論文ニュース([http://www.socialpsychology.jp/ronbun\\_news/34\\_03\\_1735.html](http://www.socialpsychology.jp/ronbun_news/34_03_1735.html))にまとめられています。ぜひご覧ください。

\*\*\*\*\*

## 第7回春の方法論セミナーのお知らせ

### 「Web を利用した調査や実験で何ができるのか?—その応用可能性と限界を考える」

2020年3月10日(火)に、前回同様、明治学院大学を会場として、第7回春の方法論セミナーを開催いたします。今回のテーマは、「Web を利用した調査や実験で何ができるのか?—その応用可能性と限界を考える」です。メールニュースならびに学会サイトでも告知していますが、会報でもあらためて告知します。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

#### 日時

2020年3月10日(火) 13:00~17:00(12:30 開場予定)

#### 会場

明治学院大学白金キャンパス 2号館2階2301教室

※アクセスマップ <https://www.meijigakuin.ac.jp/access/>

※キャンパスマップ <https://www.meijigakuin.ac.jp/campus/shirokane/>

(キャンパス内の案内版は正門からの入構を想定して設置いたします。キャンパスに詳しくない方は正門からお入り下さい)

#### 参加費

無料(事前予約不要・会員以外の参加も可)

#### 企画

日本社会心理学会学会活動委員会

#### 登壇予定の調査会社

- ・マクロミル社(<https://www.macromill.com/>)
- ・クロスマーケティング社(<https://www.cross-m.co.jp/>)
- ・LINEリサーチ(<https://www.linebiz.com/jp/service/line-research/>)

#### 登壇予定の講師(Web を利用した調査研究や実験研究)

- ・浅野良輔先生(久留米大学)(<http://ryosukeasano.web.fc2.com/>)
- ・ロバート・トムソン先生(北星学園大学)(<http://cyberpsychology.jp/>)
- ・眞嶋良全先生(北星学園大学)(<https://sites.google.com/view/yoshi-majima-lab/>)

#### 企画メッセージ

今回の春の方法論セミナーは、「Web を利用した調査や実験で何ができるのか?—その応用可能性と限界を考える」というテーマで実施いたします。

近年、社会心理学では、Web を利用してデータを収集する研究が多く見られるようになってきました。実際、ここ3年間(第32巻1号~第35巻1号)に社会心理学研究に掲載された論文、46編のうち、少なくとも1度はWeb(調査会社を通さないオンライン調査も含む)を用いてデータを収集しているものは、21編(筆者調べ)と約半数弱に及びます。Web 上での調査や実験は、大学生だけでなく、社会人からのデータ収集も可能にさせることから、研究の幅を広げるとともに、研究結果の妥当性の担保にも一翼を担うものであると言えます。また、以前では困難であった実験条件の配置等も、近年では、様々な刺激をWeb 上で提示することによって、それが可能になりつつあります。

ただし、これまでにご自身でWeb を利用した調査や実験を実施したことがない方は、「Web 上で調査や実験ってどうやってやるの?」「調査会社

とかを利用したらいくぐらいかかるものなの?という疑問を抱かれています。また、これまでに何度か Web を利用した調査や実験を実施したことがあるという方でも、「スタンダードな調査や実験以外に、どんなことができるの?」「こんなことをやりたいんだけど、Web 上での調査や実験で可能なの?」という疑問をもっておられるかもしれません。今回の春の方法論セミナーでは、大手リサーチ会社3社にお越しいただき、各社でどのような調査や実験が可能なのか(動画等を回答者に見せる、関下の刺激や様々な色を用いた刺激を提示する、特定の業種や居住地の方のみを対象とする、同一の回答者に継続して何度も回答を求める、といった調査は可能なのか)についてのお話をさせていただこうと思っております。また、その後、3名の先生方に登壇いただき、Webでの調査や実験を実施する際の注意点やその際の苦労話についてお話しいただくとともに、それらで収集した貴重なデータに関する研究を発表させていただこうと思っております。

春の方法論セミナーは、日本社会心理学会の企画のものではありますが、会員限定ではございません。会員以外の参加も無料ですので、ご関心のある方がいらっしゃいましたら、ご参加いただければ幸いです。

年度末のお忙しい時期ですが、大勢の方のご参加をお待ちしております。

## セミナー概要

近年、Web を利用した調査や実験は、社会心理学においてのみならず、他の心理学領域においても頻繁に利用されるようになってきました。Web 上での調査や実験では、幅広く、様々な特性をもった人たちからデータを収集できるため、特性毎の比較や各特性に関する詳細な検討を可能とさせます。今回のセミナーでは、そのような Web 上での調査や実験について、現状、どういったことが実施可能なのか、また、どういったデータを収集することができるのかを大手リサーチ会社3社に参集してもらい、プレゼンテーションをしていただきます。その後、3名の先生方に登壇いただき、Web 上での調査や実験を実施する際の注意点やその際の苦労話についてお話しいただくとともに、それらで収集した貴重なデータに関する研究を発表させていただこうと思っております。

## スケジュール・内容(予定)

13:00-13:10 企画趣旨説明(学会活動委員会)

13:10-13:55 調査会社3社によるプレゼンテーション 15分×3社

13:55~14:30 全体質問および個別質問、休憩含む(個別質問などは外のブース活用)

14:30-15:15 (質疑含む) 浅野良輔先生

15:15-16:00 ロバート・トムソン先生

(休憩5分)

16:05-16:50 眞嶋良全先生

16:50-17:00 まとめ(学会活動委員会)

現在、各調査会社の展示を予定しております。実際の調査に関して、詳細な話をしたい場合は、各社の展示にて相談することができる予定です。

\*\*\*\*\*

## 会員異動(2019年9月16日~2019年12月31日)

### 入会

#### 《正会員》

#### ・一般

鞠子 弘喜(海上保安庁情報通信分析官)、岡村 佳代(聖学院大学基礎総合教育部准教授)

#### ・大学院生

王 芸帆(新潟大学大学院現代社会文化研究科)、右田 晃一(大阪大学大学院人間科学研究科)、藤野 真行(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

### 退会(2019年9月16日~2019年12月31日)

木原 悠朔、澤山 郁夫、関口 元子、永田 勝彦(物故)、中谷 素之

### 自動退会

安部 幸志、荒木 貴仁、伊坂 裕子、伊藤 幸子、伊藤 哲司、上林 憲司、植村 友里、梅田 恭滋、榎本 かおり、大高 実奈、大森 直樹、乙訓 智世、笠原 美和、梶村 昇吾、片上 絵梨子、菊地 梓、岸本 瑞羽、北原 由絵、キャラミ マースメ、草海 由香里、小泉 尚子、高 天琪、小林 正稔、小松 恭子、齋藤 秀機、下川 照代、周 ペイチェン、杉浦 直樹、関森 真澄、高橋 直樹、竹内 穂乃佳、竹下 隼人、田中 健太郎、樽井 この美、千葉 柚子、寺坂 泰斗、唐 晨、豊川 航、中野 祥子、中村 文彦、西村 律子、任 毅、野崎 瑞樹、野添 健太、三上 俊治、森川

健太、森田 尚人、森脇 愛子、吉田 達、吉田 翔、呂 珂、渡辺 周央、Wilkes Hanna

### 所属変更

足立 にれか(白百合女子大学発達研究教育センター研究員)、滋野 英憲(神戸国際大学経済学部)、阿形 亜子(京都府立医科大学医学研究科大学院生)、中村 菜々子(中央大学文学部心理学専攻准教授)、横山 智哉(金沢大学人間社会研究域法学系講師)、村田 明日香(作新学院大学人間文化学部)、平野 万由子(国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺総合対策推進センター研究補助員)、塚常 健太(首都大学東京システムデザイン学部)、山本 建太郎(東洋大学大学院ライフデザイン学研究科博士後期課程)

\*\*\*\*\*

### 編集後記

今回221号は2019年11月に開催された第60回大会特集となりました。名誉会員に推戴された吉田俊和先生のコメントは次号公開予定です。お楽しみに。ところで、執筆いただいた参加記にもありましたが、大会で議論される内容がより広範なものとなりつつあると、私個人も感じます。ここで個人的に気がかりなのは、いわゆるタコツボ化です。個々の研究テーマに邁進するあまり、他領域で行われていることに無頓着になることが心配です。隣の領域と知見が整合しなかったり、逆に同様のことを主張していたりすることをきちんと把握することは、理論が弱いと言われる社会心理学領域では、理論の精緻化を図るための重要な所作だと思います。偉そうな意見ですが、社会心理学をより発展させるべく、より交流を深められればと思っています。次回61回大会も盛り上げてまいりましょう。豊島区目白でお待ちしております。(藤島喜嗣・広報担当常任理事)